

大に注意すべきことであります。

▲明治式模範姿勢 扱現在の日本婦人に向つては如何なる姿勢を要求したら宜いか、姿勢は其時代の意思に因て種々に變遷するものでありますから明治時代に於ても必ず時代に適當した姿勢が自然に起ると、思はず、或は既に多少明治時代を代表すべき風姿が現はれつゝありはせぬかと思つて居ります、そこで我々の要求する點は婦人の心が圓滿でなければならぬと共にその體も圓く何處までも優美でなければなりません、併し單に優美だけでは可けません、麗はしく優しい中に崇高と云ふ處があつて、而も堅實清新で成る可く情容を避け何となく心の堅固を示す正容でなければなりません明治の聖代は實に我國歴史上大切な時でありまして我々が今奈良朝平安朝と古に溯つて研究をして居るそれにも増して、更により大なる熱心をして千年後の我々子孫は此明治時代、或は東京朝に於ける諸般の研究を爲すで有らうと思ひます、此光輝ある時代に形造られたる婦人の姿勢は是非共前に申す優美、崇高、堅實、清新の四條件を具

備し後世の模範として恥しからぬものでなければならぬと思ひます其模範としてしは外國に例を取るまでもなく、奈良朝時代の遺物として正倉院に保存せらるゝ吉祥天女、光明皇后の御像を模寫せる觀音像、鴨毛の屏風の婦人像などは最も立派なものであると思ひます

兒童に對する尊敬

キング博士演説

◎「天國に於て大なる者は誰ぞや」との弟子の質問に對し、耶穌は殊更に嬰兒を召びて弟子達の前に置き、嬰兒の如く謙遜なる者が天國に於て大なる者なりと諭し、最後に「爾曹この小子の一人をも慎しみて輕視する勿れ、彼等が天の使者は天にありて天に在の吾父の面を常に觀ればなり」と教へられた。又當時の人々が其の祝福を受けんとて孩提を耶穌の許に連れ來るを見て弟子等が之を差止めんとしたる措置に對し、耶穌は甚く之に憤激して弟子等を戒しめ、孩提を抱きて之を祝福せられた。

此等の記事によりて見れば、兒童に對する耶蘇の態度と弟子等の態度との間に大なる差違あるを知ることが出来る。

◎耶蘇は「嬰兒の若くならずば天國に入ることを得じ」小子の一人を躓かす者は磨石をその頸に懸られて海に沈められん方なほ益あるべし」と云へり。以て其の兒童に對する考へを窺ふことが出来る同時に如何に熱心に之を教へ、弟子等が如何に強く之を感じたかは、同一の記事が三福音書共に記され約翰の書にも書かれて居るのを見て知ることが出来る。而かも此教訓が眞に解釋せらるゝに至つたのは軌近の事に屬し、近世の兒童教育は此の思想の結んだ果である。

◎小子を輕視すべからずと云ふに歸着する、兒童の性質は高尚なる徳を代表し、聖人天使の徳を代表して居る此の徳は勉めて之を尊重して保存し養成せねばならぬ或人が兒童は生けるクエツションマークである云つたが、事毎に研究的にして素直に受け容るるものである、換言すれば總ての印象に

對して感じ易い信用し易い、特性を持つて居る、故に彼等の注意は常に次から次へと遷つて行く、之れ一の事に熱心でない云ふにあらず、何れに對しても熱心なる結果である。ウオルヅウオルス曰く幼兒の一日は大人の廿日に價すと、蓋し兒童に取りては古いものとはなく萬事皆な新奇である、彼等は此の新奇なる森羅萬象を驚きの眼を以て觀察し、十分智識を貯えるのである、此の特性は人間の向上と云ふことに大切なもので、彼等は時として答辯に苦しむが如き馬鹿氣た質問をする

こともあるが、然し此種の性質は何處までも尊重し同時にこれに學ぶ所がなからねばならぬ。

◎第二の特性は無邪氣に信用すると云ふことである。若し信用し得ざる兒童あらば夫は特別にませた兒童か又は街兒の類で普通の兒童は皆無邪氣に人を信用するものである。此の特性は長ずるに及んで謙遜の心となり、教を受け愛を受け容る態度となるのである、「嬰兒の若くならずば天國に入ることを得じ」とは此の謙遜の態度の重要なことを云ふのである。此の態度は須らく尊敬すべきも

ので、亦た吾人の兒童に學ぶべき所である。彼の學者とパリサイの人を攻撃して寧ろ稅吏や娼妓の天國に入るは安しとあるは、此の眞理を道破したものである。

◎兒童はその愛せらるゝ事を自信するものである、此の自信は人間の向上に極めて重要なものである。耶穌の希望は人間が神の愛を自覺せんことにあつた。蓋し此の自覺なければ神を容るゝこと能はず、今日の傳道の困難は何時も此點に存して居る。高慢と愛に對する自信なきこと、は恐るべき罪である。此のために心の戸は堅く鎖され向上進歩は期せられない、或人は罪の中の罪は兒童の如き心を殺すことなりと云つたが、蓋し此の無邪氣なる自信の尊重すべきを云つたのである。

◎「爾曹この小子の一人をも慎みて輕視なかれ」とは、兒童の特色を輕視すべからずとの意で、兒童の人格を尊敬すべしと云ふに歸着する。兒童は親の財産にあらず、其自由は飽まで之を尊重し、決して束縛すべからずとて、耶穌は兒童の人格を蔑視し之が自由を束縛することに熱心反對せられた

のである。

◎兒童は年長者殊に親に對しては多大の信用を置き、時としては其眞價よりも以上に信するものである。故に又時々馬鹿げた問題を出して來ることがあるが、此等の間は寧ろ獎勵すべく、決して之を笑つて其の信を破つてはいけぬ、親にして兒童の信を破ることは不注意の甚だしいもので、實に寒心すべきことである。

◎兒童はそれ相應に苦勞心配を持つて居る。曾て余の弟が他の子供と遊んで居る時に仲間の耳に大小の議論が出で弟の耳は小さいと云つた、そこで弟は泣出して家に歸り母に訴へたことがある。大人から見れば耳の大小は問題にならないが兒童の小さな胸には大問題である。怒る場合には兒童の胸中を察して同情してやらねばならぬ。或る子供が指を傷けたとて親の所に泣て來た時に、親は何か忙しいことがあつたと見え「やかましい彼方へ行け」と叱り飛ばした。かゝることは兒童に取りては大打撃である、此の場合「オ、痛かつたらふ」と慰めた所で時間の上に於ても手數の上に於ても

格別の損はない筈である。如何に忙がしい時でも同情と云ふことを忘れてはならぬ殊に兒童の口に出す所は一部分に過ぎずして、多くの苦痛や心配を胸に藏して居る。又た子供相當の希望を持ち、之がため奮闘もし尚上もしやうと努力して居るから、此等は察して同情してやらねばならぬ傷める草を折ることなく煙れる麻を熄すことなし」との心もて兒童に對せねばならぬ。

◎使徒パウロは子供を怒らすべからずと云つたが恐らく彼の經驗より出でし教訓と思はる。此の意味を敷衍すれば左の意味となる。奴鳴つて怒らすな、冷罵するな、子供の面前で悪い奴だと云ふべからず又たお前は悪いが誰某は善い子だ之を模範とせよと云ふが如きはいけない、子供の獨立心を損するな無暗に試験をしたり苦しめたりしてはいけない。

◎最後に兒童の價値を尊重すべし。彼等が天の使は天にありて天に在す吾父の面を常に覲ればなり。兒童の價値は無限なり、故に之を尊重すべしとの結論に歸着する。此の教訓は先づ幼稚園とな

りて現はれた。彼のベストタロツチが子供に取り巻かれて居る像は我等に偉大なる感じを與ふるのであるが、兒童に對する要義は結局愛と尊敬にあり。如何に方法手段の完全するも、兒童の人格、性質、價値に對する尊敬と及び之に對する愛がなければ兒童の教育は成功しないのである。而して兒童を尊敬し之を愛するは同時に神を尊敬し神を愛する所以である。耶穌曰く「わが名の爲に此の如き一人の嬰兒を授る者は我を授るなり」と。

婦人と園藝

梅の花は既に散り櫻を首め種々様々の花が追々に咲き出さうと云ふ、一年中の最も楽しい春は是からです。申す迄もなく若草が毎日に伸びるので野原は廳て一面に青い絨毯を敷き延べた様に成り、木の葉も亦何時となく滴らん許りの縁を飾りませう。斯く愉快な陽春の季節は蔬菜の播種や草花の培養や樹木の植付けに至極適當なのだから、此好機を逸しないで、近頃世間に喧傳されて居る園藝